



春日台センターセンター

春日台センターセンター

teco



洋品 **パン**
PAND

生産性や労働力の視点では縮退へ向かうとひと括りにされる地域も、目を凝らして向き合い時間を共にする中で、力強く暮らしを組み立てる活動に出会います。生産人口とみなされない子どもや高齢者は、昼間に地域と結びつくまちの大切なプレーヤーと言えますが、彼らが生き生きと暮らすにふさわしいまちの環境づくりは十分ではありません。民のガバナンスにより管理と自由が調律され、活動の環境が整えられる時、合理や制度による空間とは違う、本質的な居場所が立ち上がると考えています。神奈川県愛川町、1960年代後半に開発された宅地の商店街において、かつて賑わったスーパーマーケット「春日台センター」の跡地を、福祉を核に再びセンター化する計画であり、福祉事業者と建築家が、長い年月を掛けてプログラムや規模など枠組み作りから協働したプロジェクトです。多数のプログラムを大施設として集約するのではなく、まちのスケールに合わせて分棟で計画し、通り道や土間が貫通しながらも統合する大屋根が架かります。ここでは、昼寝し、駆け回り、宿題し、新聞を読み、ゆっくり働き、洗濯を畳み、惣菜を買い物に来て井戸端会議をするなど、老若男女が思い思いに過ごしています。



春日台会館

春日台会館入口







春日台センターセンター

洗濯
文化
研究所

ダウン
ジャケット
羽毛ふとん
スニーカー
など
洗えます！
洗濯
文化
研究所































春日台センターセンター









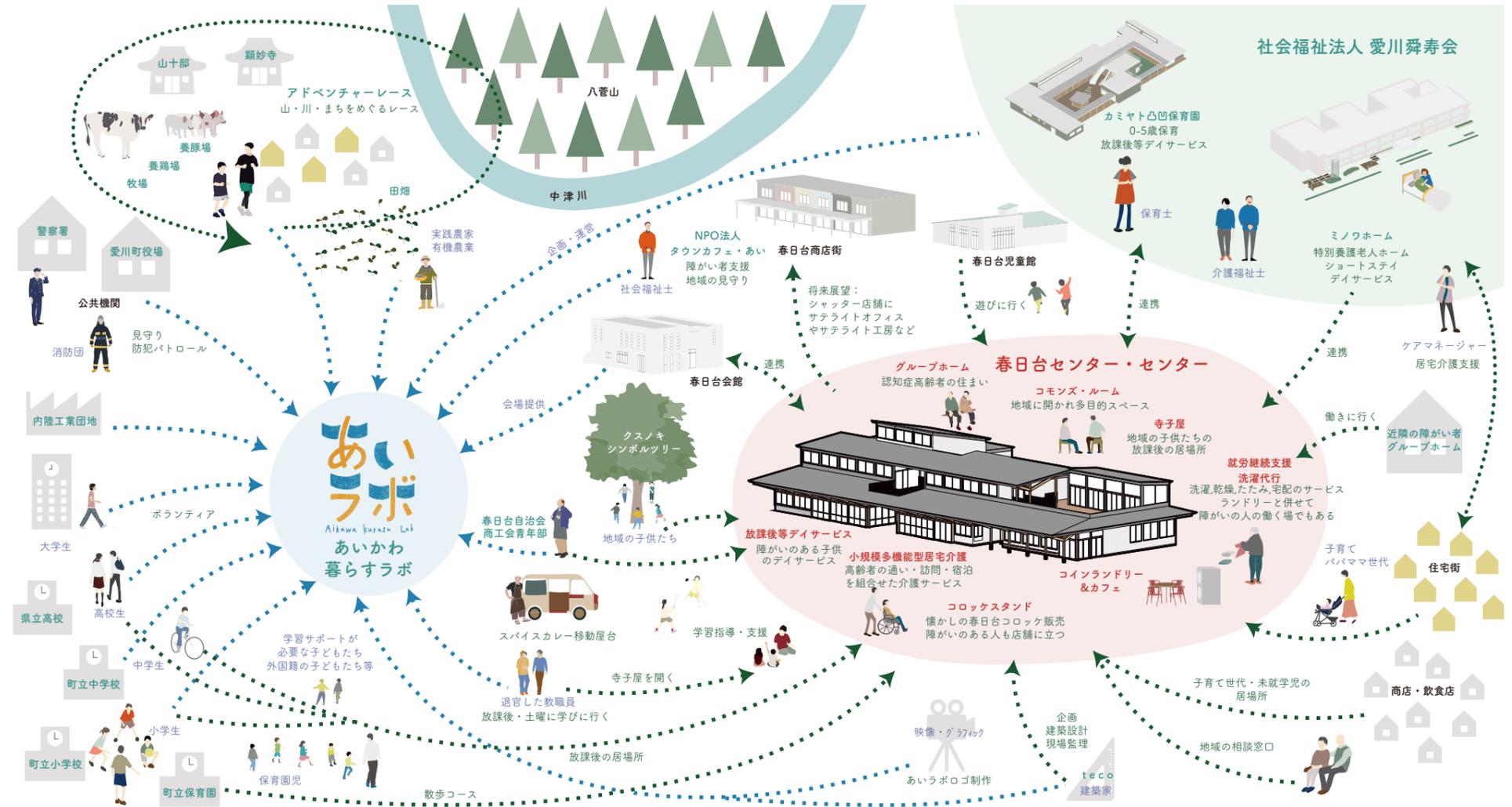
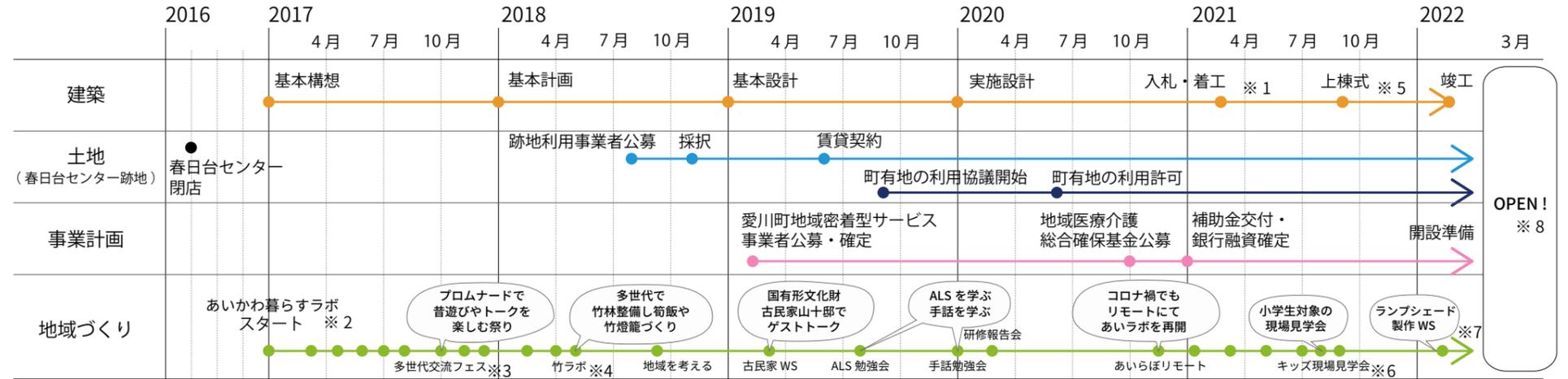
枠組みから協働する：あいラボの結成と地域活動

プロジェクトのプロセス

2015年末の計画始動の際には、プログラム、規模、スケジュールなどが未確定でした。本質的な地域の拠点を求め、事業者とともにワークショップ「あいかわ暮らしラボ（通称、あいラボ）」を結成し、定期的に地域の人々との対話を重ねてきました。同時に、土地活用の交渉、町の福祉計画における拠点設置への提言、経営方針を踏まえた事業規模やプログラム検討など、基本設計の前段階として約3年間を費やし、事業の枠組みづくりから協働しました。

作成したあいラボ通信

各々が役割を探し、自主的に活動する人の集いとなったあいラボにおいて、私たちのできる役割として、活動のアーカイブを行い、お土産で配布する通信を毎回作成しました。



あいラボの活動を通して見えた地域の課題

- ・「春日台センター」のコロケが皆に愛されていた。
- ・内陸工業団地の働き手として外国籍移住者の増加、外国人居住比率は県一位。
- ・外国籍の子供に教育の遅れ＞不登校児の増加＞学習支援活動の必要性。
- ・若者の集合場所は、明るく綺麗、無料で冷暖房の効くコインランドリー。
- ・緑に富み田畑が美しい＞自然資源を活用したアドベンチャーレースの開催。
- ・自然資源は美しいが、高齢化に伴う管理の困難。

など、まちの課題や魅力的な資源をネットワークとして意識しながら、制度上な福祉拠点のみならず、文化共生拠点としての役割を感じるようになりました。右図は、こうした関係を「愛川町のプレイヤーとネットワーク」として示したものです。

背景から建物配置まで：地域の課題と歴史への理解と計画

1. 美しいまち愛川

神奈川県中央北部に位置する愛川町は、都心から50km圏、厚木市、相模原市などへの通勤圏内にあります。河岸段丘に広がる町の西部には仏果山を最高峰とする山並み、町の南東部には相模川と中津川に挟まれた標高100mほどの台地が広がる緑豊かなまちが形成されています。町の東部には、戦前の相模飛行場跡地が開発された内陸工業団地が位置し、機械工業、流通拠点として知られています。そこには南米からの出稼ぎ労働者も多く、県内1位の外国人居住者率となっています。



3. 地域の中心『春日台センター』と世代の変遷

春日台地区は、1から5丁目までの住宅街区に加え、丁区ごとの公園、保育園、幼稚園、小学校、中学校が集められ、中心には、開発当初より地域の心臓部であるスーパーマーケット『春日台センター』がありました。1960年代後半に移住した親世代、その子世代、孫世代が住まうこの地域には、世代変化に伴って「春日台センター」が姿を変え、活気のある中心を形成してきました。

①親世代（団塊世代）

1969年に完成し、全国からこの地に労働者が移住した「春日台区」。当時、桑畑だったところが順次開発され、その中心に「春日台センター」がつけられました。



4. まちと呼応する配置

「春日台センター」の土地を神奈川県住宅供給公社から貸借し、計画を進めるにあたり、地域の主要な公園や街区割からなる軸線と、まちの住宅地や建物のスケール感を参照に、ボリュームを分割しながら道を引き込む配置としました。まちのつくりと呼応した配置によって「大型福祉施設」から脱却し、まちに溶け込む共生する文化拠点を目指しました。



2. 産業ベッドタウン -1960年代に開発された春日台地区-

愛川町のなかでも春日台地区は、県の1965年内陸工業団地計画に伴い、従業員向けの住宅地として計画されました。当時、一面に広がっていた桑畑を開発し、県住宅供給公社によって33万平米の宅地が造成され、1968年に「春日台」という地名が正式決定されて順次分譲されました。



②子世代（団塊 Jr. 世代）

幼稚園・小学校・中学校が半径150m内にあり、多くの子どもがこの地で育ちました。駄菓子屋やスーパーがあり、多世代が自然と交わる共生のプラットフォームでした。



③孫世代（団塊 Jr. 子世代）

春日台病院は撤退、商店街はシャッター化し、スーパーが2016年4月に閉店。その後2022年に地域共生文化拠点「春日台センターセンター」として生まれ変わりました。



5. 越境する大屋根

スーパーマーケット「春日台センター」と商店街をつなぐプロムナードは、地域の人々が集い賑わうまちの心臓部でした。いずれも大きな庇をプロムナードに張り出し、風雨のなかでも人々の活動を支えてきました。そこで、町との協議を積み重ね、「春日台センターセンター」においても町の公有地へと大屋根を張り出すことで庇の連続を継承しています。



超複合福祉施設：まちに必要な小さな機能の集合体

これまで制度により隔てられてきた7つの機能を融合し、利用者のケアにとどまらない地域全体を支える新しい福祉を目指しています。制度上のサービスは1～4、地域の人々が関わる制度外の枠組みとして、5～7の3つがあります。

1 認知症グループホーム

9人1ユニットの少人数で構成される認知症の高齢者の住まい

2 小規模多機能型居宅介護

介護認定を受けて人のための通い・宿泊・訪問を組合せた介護サービス

3 就労継続支援A型「洗濯代行」

>家事労働のサポート機能。洗濯物を預かり、洗濯・乾燥・畳み・宅配する。

就労継続支援B型「コロッケスタンド」

>家庭の夕食を支える惣菜屋。懐かしのコロッケやお惣菜、コーヒーを販売。

いずれも、障がいのある人が地域と繋がりを持ちながら働く場

4 放課後等デイサービス

障がいのある子どもが通う、放課後の学童のような居場所

5 寺子屋

就労支援の活動や、言語の壁で教育格差を抱える子どもたちの寺子屋、ヨガ教室やゼミ利用などのできるスペース。

6 コインランドリー

地域の人の居場所であり、家事労働を支える場

7 コモンズルーム

放課後には小学生が集い、高校生が受験勉強し域の人が会合やイベントに使用するなど、地域に開かれたスペース

プログラムのゾーニング



建築概要

所在地 神奈川県愛甲郡愛川町春日台 3-6-38

主要用途 認知症グループホーム(9人/1ユニット×2)・小規模多機能型居宅介護施設(登録25名、通い15名、宿泊8名)・放課後等デイサービス(10名)・就労継続支援A型(10名)、B型(10名)・洗濯代行・コインランドリー・コロッケスタンド・寺子屋・コモンズルーム、貸室

建主 社会福祉法人愛川舞寿会

設計

建築 teco

担当/金野千恵 泊駒香 村部壘*(*)は元所員)

構造 オーノ JAPAN 担当/大野博史 藤田竜平

設備 ZO 設計室 担当/清水真紀 柿沼雄三

ランドリー計画 OKULAB 担当/永松正平 尾野勝

植栽計画 長島緑園土木 担当/長島典正

ロゴ・サイン woolen 担当/福岡南央子

ランプシェード teco 担当/金野千恵 下岡未歩

あいラボロゴ 担当/いよりさき

監理 teco

金野千恵, 泊駒香, 照井飛翔, 村部壘*(*)は元所員)

施工

建築 栄港建設 担当/長谷川健二 ムンパト・シバートル

規模

敷地面積 1508.41m² 建蔽率 54.35% (許容:70%)

建築面積 819.89m² 容積率 74.59% (許容:200%)

延床面積 1130.62m² 1階 755.44m², 2階 375.18m²

階数 地上2階

最高高 8,177mm

軒高 8,002mm

階高 3,060mm

主なスパン 2,730mm × 3,640mm

敷地条件

地域地区 第1種住居地域 法22条地域

道路幅員 南11m 北東6.5m

構造

主体構造 木造

杭・基礎 ベタ基礎

工程

設計期間 2019年5月～2021年2月

施工期間 2021年3月～2022年2月

写真

*1: morinakayasuki, *2: shinkenhciku-sha

その他: teco

平面計画：「まちのみち」と「土間通り」による連続と分節

計画敷地は、南面に商店街のプロムナード、北側には住宅地が広がります。

施設型建築ではなく、ボリュームを3つに分割し、南北を横断し宅地の軸線と繋がる通り道を設けると同時に、ボリュームを東西に貫通する通りを計画しました。これにより、多様なプログラムが連続しながら個別の活動を大切に作る分節が生まれています。



2階平面図 S=1:400



1階平面図 S=1:400

構造計画

複合施設における構造計画的な課題 方杖を連続的に利用した大屋根

本計画は7つの機能を一つの建築物におさめた複合施設である。その使い方は宿泊や訪問介護、就労業務支援、商業など多岐にわたり、地域の人々が利用できる拠り所となる場所として計画されている。空間的な質と大きさが周辺に配慮して多様に計画され、構造部材の配置、適正スパンの設定が悩ましい建物であった。

宿泊施設などの空間単位が多く計画されていたことから、まずその幅である1.5間(2.73m)を構造のスパンとして考えた。それ以上となると小梁断面が大きくなるし、小さいと平面計画的に無理が生じる。また、木造とする場合には一般的な住宅用の流通材で構成しておくことで競争原理が働きコストを抑えることが可能だからである。X方向のスパン割を2.73mとし、そのかわりにY方向にはスパンを大きくとり食堂やコモンズルームなどに柱の落ちない計画とした。

また水平力に対しては、宿泊機能など壁の多く用いられる部分を耐力壁と評価し、それぞれのボリュームに必要な耐震性を確保している。一方で、2階は天井高さを高く確保する計画のため、耐力壁を途中で止め、上部の方杖が水平力の伝達経路となるように計画した。解放性の高い空間、水平連続窓からの光を取り入れるための配慮である。

方杖による構造は、ラーメン構造ともトラス構造とも言える中間的な構造形式で、断面と長さが限られた一般流通材を用いて大きなスパンをかけたり、立面の解放性を確保したりするには経済的な構造形式である。木材同士を接合する際に問題となる引張り応力が鉛直荷重作用時には発生しない方杖は突きつけの接合が可能で、特殊な金物を用いずに簡潔な接合部による木造を実現できる。建物全体に広がるレベルの異なる大屋根は、それぞれがバラバラに動くことのないように、方杖を伝達経路として、各所に配置された通し柱(150角180角)に接続し、地震時に柱の曲げ剛性によって応力伝達するように計画されている。

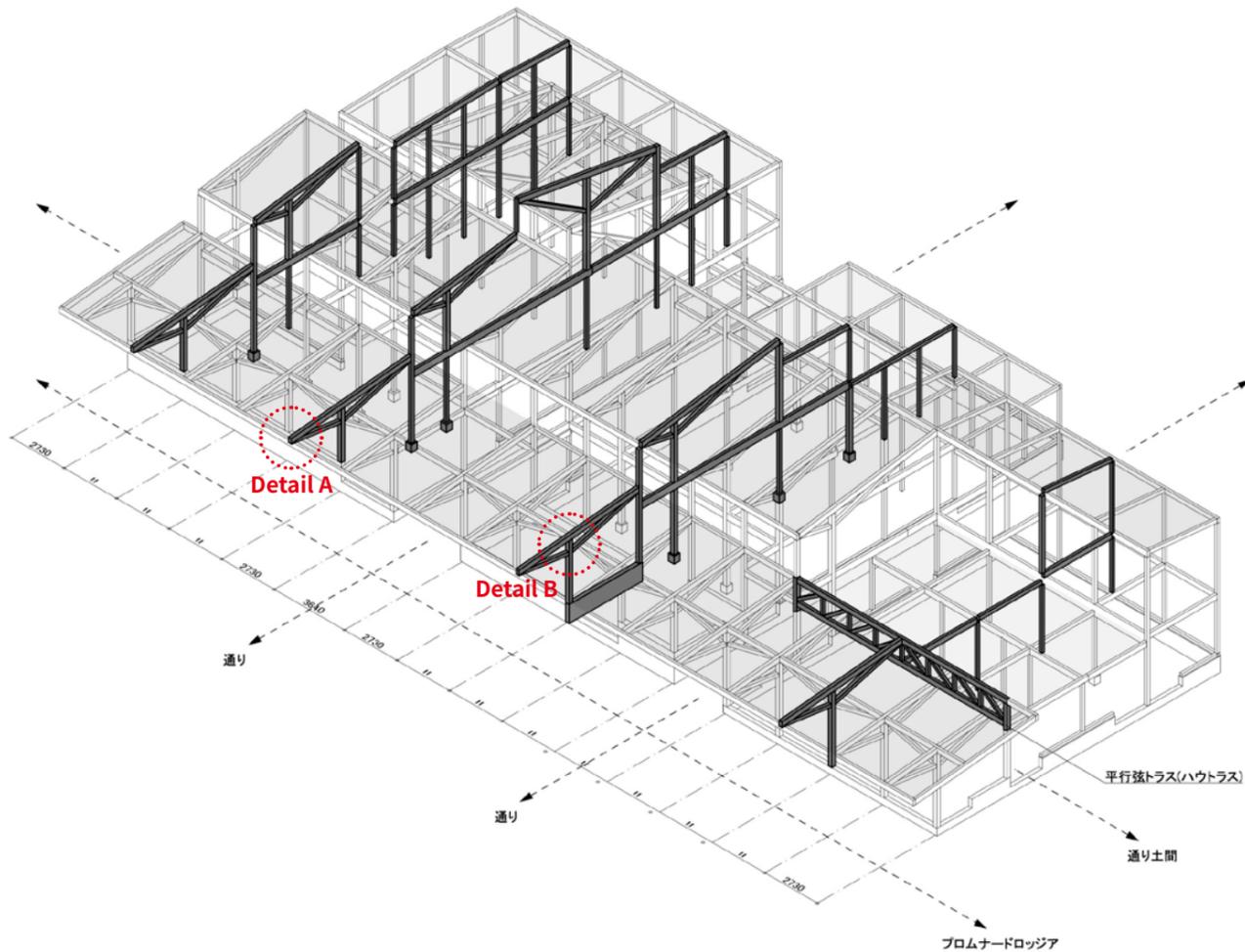
プロムナードにかかる大屋根 燃え代設計と燃え尽きを許容する設計

前面のプロムナードに沿って軒スパン2.73メートルになる大屋根がかかる。最も解放性の高い空間が要求された場所でもある。水平力に抵抗する要素になる壁的なものが一切ないので、ここでも方立てを利用した方杖架構により開放感を実現している。建物長さ方向に配置された欄間部分の方杖は柱と梁によりラーメン構造の一部として、水平力に抵抗することが想定されている。それだけでは剛性として足りないところでは、柱脚部の固定度を高めるために、基礎立ち上がりを利用し、そこにグルードインロッドによる半剛接合を採用している。

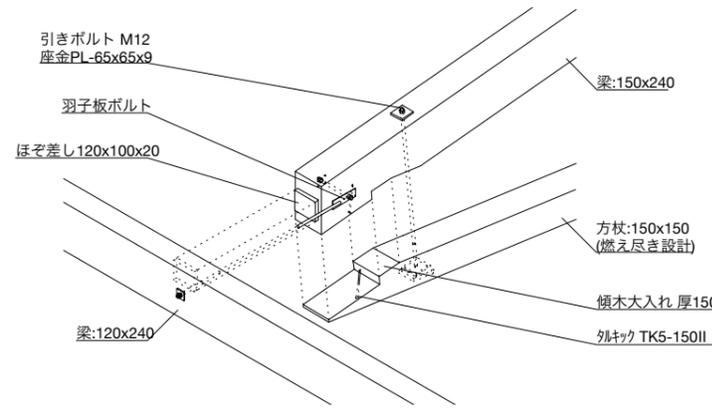
鉛直荷重に対しては、カンチレバー方向にも方杖を配置し、釣り合うように、反対側へも方杖を伸ばし本体の通し柱に接続している。

本計画は主要構造部を準耐火構造としたイ準耐として設計を行っている。一部露出する柱梁には建告1902号による燃え代設計を行い、耐火性能を確保している。燃え代35mm分、増えた断面は、火災時以外にも構造断面として寄与するため、それを有効活用した設計ができるのではないかと考えた。

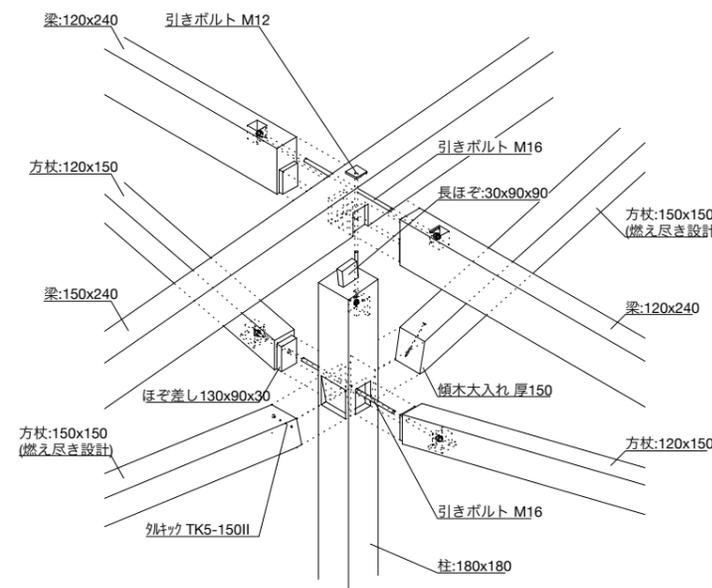
通常時、長期荷重に対しては安全率の増加として考え、地震時には増えた断面をラーメン構造の柱剛性に評価する方法である。燃え代設計で求められる断面は、地震時に求められる柱断面と同程度となり、プロムナードの柱サイズを180角としている。また、方杖については、燃え代を評価すると断面が大きくなりすぎるために、火災時には「燃え尽き」を想定し、それ以外の部分で安全性を確保している。火災時、方杖が焼失した場合でも、被覆で覆われた屋根梁が残り、それを短期許容応力度設計が可能なカンチレバー梁として設計をおこなっている。仮に方杖をなくしてしまうと、梁には長期荷重時に求められる変形性能を満足する必要があるため、大断面になってしまう。方杖を有効活用し燃え尽きる設計を導入することで、軽快な大屋根を実現している。



構造アクソメ図



Detail A 方杖の負担する圧縮力は大入れによるウッドタッチで伝達される



Detail B 在来の仕口で構成された柱と方杖の接合部



プロムナード沿いのコンクリートは基礎として利用されている



方杖と接続する構面から順次建て方を進める様子